

五輪の鼓動 もう一度

64年大会の鼓隊員、交流今も

世界が注目した1964年の東京五輪の開会式で、鼓隊を組んでパレード行進し、喝采を浴びた少年少女がいた。当時の小学6年生は今や還暦を過ぎ、半世紀にわたる交流を続けている。人生2度目の東京開催に期待する面々は、指導を受けた恩師と約30年ぶりに再会する計画を温めている。

鼓隊を務めたのは、東京都新宿区立牛込仲小学校の6年生の中から選ばれた31人だ。64年10月10日。腰のあたりに太鼓を下げ、おそろいの水色のジャケットと帽子で、国立競技場(東京・新宿)のトラックを一糸乱れずに行進。ローマからわた



当時のユニホームを手に鼓隊の思い出を語る福田さん(静岡県南伊豆町)

「この目で再び見たい」

った五輪旗を誘導する大役を果たし、惜しみない拍手が送られた。

卒業後もおむね5、10年ごとに10、20人ほどが集まり、昔話に花を咲かせる。昨年12月には還暦を祝いあった。

メンバーの一人、加賀美伸子さん(61)は東京・新宿は「みな50年たって太鼓のリズムが体に染みついてる」。宴席の場が盛り上がり、一同がバチに見立てた箸でリズムを刻むこともあるという。「鼓隊のおかげでできた縁を感謝する。

メンバーは「とにかく厳しい練習だった」と口をそろえる。依頼が舞い込んだのは9月になってから。放課後の猛特訓は20日余り続いた。同小の音楽教師だった杉山和子さん(87)は「同・板橋は「失敗したら教師を辞めるつもりだった」。

正確な歩幅を刻み、列をそろえるため物干しざおを手に指導したという。

加賀美さんは、見栄えにも完璧さを求める杉山さんから「膝のかさぶたがなくなると開会式

には出しません」と言われた。直前の運動会のリレーで転倒した際にできなかったかぶたを必死にはがした思い出がある。

約10分の行進を終え退場したゲートで、杉山さんは満面の笑みで教え子を迎えた。「本当に立派にやり遂げてくれた」

列の後方を歩いた福田敏武さん(60)は静岡県南伊豆町は重圧から解放された直後、外国人選

手に握手を求められ「至福の時だった」と振り返る。指揮者を務めた前田行輝さん(61)は「東京・江戸川は「その後の人生で度胸が据わり、初めてのことも緊張しなくなった」と胸を張る。

2020年東京五輪招致の成否は日本時間8日に決まる。福田さんは「難しいことは抜きにして、単純にこの目で、もう一度見てみたい」。

前田さんは「五輪は社会を映し出す。当時と今で時代がどう変化したかに注目したい」と思う。

招致の成否にかかわらず、仲間は近く会合を開くつもりだ。「精いっぱい頑張ったことは生涯自分を支えてくれる。体験していない人には分からない」。こう話す恩師を招くプランを温めている。

さあ招致へ本番だ プレゼン最終リハーサル



空港に到着した東京五輪招致応援のツアー客ら(5日)＝共同

応援ツアーも到着

ームは5日(日本時間6日)、アルゼンチン・ブエノスアイレス市内の総会場で非公開の最終リハーサルを行った。約100人の代表団がほぼ顔をそろえ、全体の流れを確認した。

終了後、報道陣の取材に応じた東京都猪瀬直樹知事は「前回より良くなった。この勢いで本番に臨みたい」と順調な仕上がり強調。

海外メディアに招致を争つマドリッド(スペイン)が優勢との報道も目立つが、「手応えはあるし、チームワークも非常にいい。やり残したことに

前田さんは「五輪は社会を映し出す。当時と今で時代がどう変化したかに注目したい」と思う。

招致の成否にかかわらず、仲間は近く会合を開くつもりだ。「精いっぱい頑張ったことは生涯自分を支えてくれる。体験していない人には分からない」。こう話す恩師を招くプランを温めている。

一方、ブエノスアイレスの国際空港には5日午前から、東京への招致を応援しようと、日本からのツアー客一行が続々と到着し始めた。

「ブエノスアイレス」は「国際オリンピック委員会は(IOC)総会を2日後に控え、東京の招致

一方、ブエノスアイレスの国際空港には5日午前から、東京への招致を応援しようと、日本からのツアー客一行が続々と到着し始めた。